

天文民俗調査報告(2018年)

北尾 浩一*

概要

2009年より天文民俗調査報告を開始してから10年目となった。2018年においても、日々の暮らしのなかで形成された星名伝承を伝えている話者に会うことができた。イカ釣りの役星等の伝承についても山形県、山口県において記録することができた。

1. はじめに

1978年、新潟県佐渡郡相川町姫津(現 佐渡市)より星の伝承の調査をはじめてから41年目になった。調査を実施した地域は、「東北地方」「中部地方」「近畿地方」「中国地方」である。

2. 調査の概要

2-1. 調査方法

漁業に従事した経験を持つ高齢者(おおむね昭和15年以前の生年)を中心にインタビュー調査を行なった。最も高齢の伝承者は昭和2年生まれ、最も若い伝承者は昭和25年生まれであった。なお、星名とともに年中行事(七夕)についても調査対象とした。

2-2. 調査地

2018年は、次の16箇所で行った調査を実施した。

- ・3月…兵庫県神戸市長田区駒ヶ林町
- ・6月…山形県酒田市入船町、船場町、山居町、飛島中村、飛島法木、秋田県にかほ市象潟町
- ・8月…宮城県石巻市網地浜、長渡浜根組(網地島)
- ・10月…山形県鶴岡市鼠ヶ関、新潟県村上市寝屋、桑川、塩谷、北新保
- ・12月…山口県萩市田万川町江崎、玉江浦

3. 各地域の星名伝承

2018年に各地域で記録した星名伝承の概要は、次のとおりである。

3-1. 東北地方

秋田県、山形県の調査を実施した。

(1) 秋田県にかほ市象潟町

話者(昭和14年生まれ)は、イワシボシ、アオボシを伝え聞いていたものの、実際に目標にした経験はなかった。

「イワシボシとかなんとか言っていた。昔、イワシあがったから。イワシボシとも言った。イワシが大量にあがったからね」

「3月から5月、イワシ。刺網(さしあみ)。網、朝方、7時網あげる。沖に行くのは2時か3時(昼の2時か3時)だな。夜やる。ねむられんよ。ひとつも」

「アオボシとか、イワシボシとか、そういうようなこといっぱい言っていた。夜の仕事だから」

「イワシボシとか。イワシとるからイワシボシとか。どっちのほうに出るとか、さだかでないけど」

(2) 山形県酒田市入船町

話者(昭和13年生まれ、飛島出身)は、若い頃、磯舟に乗ってトンボやハネゴという漁具を使用してイカ釣りをしていた。目標にしていた星はサンコウ(オリオン座三つ星)だった。

「星はつきがちがうんだ。サンコウさまって。サンコウって星があがるときイカつくとか」

「あかい星三つ並んで出るんだ。きれいな星な。光の強い星。ふつうの星より光が強い」

「サンコウあがるからイカつく頃だよ」

ミョージョー(明けの明星)も目標にした。

「ミョージョーって夜明けあがる星がある。アケノミョージョーあがるとき朝イカがつくとか」

北斗七星のことは「ホクトナナセイ」と呼んだが、イカ釣りの目標にはならなかった。

話者によると、いまは星を目当てにしないが、月の出

*中之島科学研究所
starlore_kitao@yahoo.co.jp

は、いまもイカがつく。

星の出にイカが釣れる理由についてたずねると、「わからない」「タイミング」という答えが返ってきた。

(3) 山形県酒田市山居町

話者は昭和24年生まれであり、星を目標にする仕事を経験していなかったが、年上の人が、「アオボシの出、月の出、イカつく」と言っていたのを聞いていた。アオボシがどのような星かも知らないものの、年上の人がアオボシと言っていたのをはっきりと記憶していた。

(4) 山形県酒田市飛島法木

話者(昭和16年生まれ)に、イカ釣りの役星、スバリ(プレアデス星団)、サンコウ(オリオン座三つ星)、アオボシ(シリウス)について聞く。

(W:話者、K:北尾)

W「んだ、んだ、んだ。櫓かいで。トンボ、ハネゴというのは、櫓かいで」

K「その頃、星が出たとか」

W「いまでも言う。我々で言う。スバリ、スバリって星の名前を言っていたけども。あとサンコウとかのお。サンコウって、三つこう並んで縦に出た。並んで出た。縦に三つこう並んで、同じ等間隔で三つ出るとか。東のほうから出てくるわけよ」

K「どっちが先ですか」

W「スバリがいちばんはやいんだ」

K「スバリがいちばんはやい？」

W「んだ、んだ、んだ」

K「スバリいうんですね」

W「我々、島の言葉だ」

K「スバリが出てその次に出るのが」

W「サンコウだな。三つ明るいからサンコウいっているのではないかな。漁師の浜の言葉だ」

K「そのあと出るとかですか」

W「そのあとの明るい星ひとつよ」

K「明るい星ひとつ？」

W「これ、われわれは漁師言葉ではアオボシ、アオボシって言ったのだけど」

話者によると、星の出、月の出、日の出、日の入りを目標にしていた。

W「やっぱり、星の出る頃はイカついたりするんだよな」

W「月出(つきで)とかのお。必ずとれる。日の出と日の入りで騒ぐのと同じじゃ」

調査を実施したのは、6月23日であった。明け方、スバリを見ることが可能になる時季であるので話者に確認すると、「このごろ夜は出ねえから。でも、夜明けは出ていると思うよ」という答えが返ってきた。

曇り空でイカ釣りの目標の星が見えないときについて聞く。

K「曇っているときはだめなのですか。星が見えるときで

ないと？」

W「いやいや。だいたいイカ釣りの商売をやっているときは、だいたい何時頃なれば、どの星あがってくるとわかるものだ」

K「何時頃なればどの星あがるとわかる？」

W「そうそうそう。わかっているものだ」

K「曇あっても？」

W「曇あってもわかるものだ」

K「曇で見えなくてもわかる。釣れるのですか」

W「やっぱり釣れるときある。必ず釣れるものでねえけど」

K「曇っていてもわかる？」

W「だいたいよ、きょうは何時頃、星が出るとわかるものだ」

K「曇っていても、見えなくても」

W「んだんだ」

曇り空でも星の出を感じたのであるが、「月の出るときもそうですか」と確認すると、「月の出はやっぱりつく。星より月の出が多いな」という答えが返ってきた。

(5) 山形県酒田市飛島中村

話者(昭和14年生まれ)は、イカ釣りの役星ヒバリ(プレアデス星団)、サンコウ(オリオン座三つ星)、アオボシ(シリウス)を伝えていた。

「ヒバリ、サンコウ、アオボシめあて」

「アオボシ、おそく出る。アオボシ、ひとつ」

(6) 山形県酒田市飛島中村

話者(昭和17年生まれ)は、イカ釣りの役星シバル(プレアデス星団)、サンコウ(オリオン座三つ星)、アオボシ(シリウス)を伝えていた。

「シバル、小さいのごじゃごじゃかたまつた」

「アオボシ、ヨアサ(夜明け)、いちばんイカつく」

(7) 宮城県石巻市長渡浜根組(網地島)

話者(昭和13年生まれ)は、イカ釣りの役星ウヅラボシ(プレアデス星団)、ミズボシ(オリオン座三つ星)、アトヒカリ(シリウス)を伝えていた。岩手県下閉伊郡田野畑村出身で16歳のとき網地島に来た。仕事に必要な知識は網地島で習得した。

「ミズボシとかウヅラボシとか…あるある。どの方向に見えたとか、よくわからないけれども」

「あれ見えた～漁が終わりだとか、確かにあった」

「ウヅラボシと言っているのを聞いただけ」

「ヒシヤクボシって聞いたことあるだね。なにかこういうふうにあるんだ。それも聞いたことある。確かに星をもっていくと、こう、柄杓のようになるのかな」

「アトヒカリとかなんとか。あとから大きな星が。終わりだ、終わりだ。これが出れば終わりだ。いろいろやっているうちに、その星が見えていると帰るといような、そういう意味の後(あと)の光というよな、聞いた覚えがあるね。」

あたりにいろんな星が見えていても、そのときなくても、その時間たったあとにたぶん見えた星だと思う。けっこう大きく光った星だった。相当、大きく光っていた」

年寄りがこの星が出たらイカつかなくなるから帰る…とか言ったのを覚えていた。その星の出る間、出る前くらい、イカが釣れましたが、仕事として体験した期間が短く自ら経験を重ねたわけではなかった。

3-2. 中部地方

新潟県村上市の調査を沼澤茂美氏、沼澤和美氏の協力を得て実施した。

(1) 新潟県村上市寝屋

話者(昭和10年まれ)は、最初はホクトシチセイと呼んでいたが、話を進めているうちにナナツボシという年上から伝承されてきた星名を思い出すことができた。

(W:話者、K:北尾)

W「夜も昔は商売したもんだ。鯛釣り。夜、延べ縄(のべなわ)で」

W「ホクトヒチセイ、あれから南の星、北の星だとか。自分らで覚えてね」

K「ななつの星は？」

W「天候がよければ見えるわけだ」

K「北斗七星のことを七つという人はいなかったですか」

W「ななつぼし。それは言います」

誘導尋問になってしまったかもしれないと念には念を入れて、「ナナツボシは言います？」と確認すると、「はいはい。年いった人は…」という答えが返ってきた。

K「ナナツボシと言ったのはこの人ですか」

W「そうそう。むかしの明治時代。ほとんど、漁業やっている人。昔の人は松前へ行っていた。昔は、機械もない。星をたよりに。星は昔の人はわかりました」

(2) 新潟県村上市北新保

大池近くで畑仕事をしていた話者(昭和19年生まれ、南田中在住。北新保出身)は、ミツボシ(オリオン座三つ星)、ナガレボシについて伝えていた。

「ミツボシとか、聞いていました。星は… 子どもの頃、ミツボシ出ているから明るいからね…とか。外出てみて見てみてと… 夏から秋にかけて9月頃だったかなあ。ミツボシ見てみい…て。三つ並んでね」

「星が流れる。あれは亡くなってどっかいく。あれはどここのじいちゃん、ばあちゃん、流れていったんだよ。星になって流れていって、挨拶だよ…て教えてもらった。子どもの頃なんて、みんな夏になると、ゴザひいて眺めて。夕涼みして」

ところで、『岩樟舟夜話』に星の降る池についての伝承が記されているが、話者に尋ねると「池に星が降るとい話は聞いたことがない」という答えが返ってきた。



星の降る池—おおかみ星と熊手星と…
(沼澤茂美氏撮影)

(3) 新潟県村上市塩谷

話者(昭和13年まれ)は、「星のことは言わない。魚のことばかり」と語った。流れ星について、「船に乗っていればナガレボシ出る。大きんだのお〜て。話することないから。ナガレボシ、大きんだのお〜」と語ったものの、星を目標にすることはなかった。

七夕のときは、麦藁で作った船を小学生がかついで歩く。「七夕、おくらべ、来年(れいねん)またござれよ、八月様よ」と歌って歩く。「ござれよ」は、来ざれよ、おいでくださいーという意味、「おくらべ」は、送りましょうという意味だった。

小学1年生を先頭に歩き、6年生は太鼓をたたく。太鼓はリヤカーにのせる。舟は1mくらいの大きさで二人にひとつ。舟の中にローソクを立てた。消防の火の見櫓から見ると、ローソクを舟の中にたてて歩く様子がきれいに見えた。夜、暗くなってから2時間くらい歌って歩いた。いまは、麦わらの船でなくリヤカーに竹と笹を乗せて歩くようになった。子どもが少なくなり、大人が主体になった。

楽譜 新潟県村上市塩谷七夕の唄

採譜者 北尾正子

3-3. 近畿地方

兵庫県神戸市長田区駒ヶ林町の調査を実施した。

話者(昭和15年生まれ)は、スマル(プレアデス星団)を記憶していたものの北極星については、名前を思い出すことができなかった。

「スマルいうのはある。朝あがる。朝、この辺、あかいあかい星な。スマルボシや。あれ、朝な、4時くらいからあがってくる。夏な。はやい」

「スマルボシや、朝、東からあがる。夜明け前や。あれあがったら夜明けしてくる」

「星で方向をな。コンパスのないじぶん、いごかん星や。わかるや方角がだいたいな」

3-4. 中国地方

山口県萩市の調査を山口県立山口博物館の松尾厚氏の協力を得て実施した。山口博物館の中島彰氏が1980年代に記録したフヨタロー(カノープス)や茶粥星(アルクトゥルス)、山田星(シリウス)等の特徴のある星名(北尾 2018)を伝えている話者に出会えなかったが、次のように萩市玉江浦の話者(昭和10年生まれ)は、星の出をイカ釣りの目標にしていた。

「年の上の者がね。年取った者が言いよった。なににの星だから、オオボシの出とかのお。オオボシ出、夜明けに星が出る。星が出るとイカがつくぞ、とよう言いよった。ああいうことはみんな言いよった」

「星の出だからイカつくぞ、と年取った者が言いよった」

4. 特筆すべき星名伝承

4-1. イワシボシ(鰯星)

千田守康氏が宮城県桃生郡雄勝町水浜(現 石巻市)で記録した。話者は、秋田県由利郡象潟町(現にかほ市)出身で、象潟町に伝えられている星名であった。

「五月の夕刻のころだな。鳥海山の上にイワシボシかかるようになるとイワシがとれるようになる。刺し網の打ち時はその星の高低で測ったそうだ」(千田 2015)」

千田氏は、象潟町から見た鳥海山の方位、高度、そして話者の伝えていた季節、時刻からスピカであると考えた。千田氏が宮城県で記録したイワシボシは、現在も秋田県にかほ市で伝えられていることが本調査で明らかになったが、残念ながらスピカと同定するための詳細の伝承は記録できなかった。

4-2. イカ釣りの役星

山形県酒田市飛島は、1970年代から三上晃朗氏、横山好廣氏をはじめ多数の調査が実施された。三上氏は、アオボシ、サンコウノアトボシ(シリウス)、キョクボシ(フォーマルハウト)、横山好廣氏はシンバリ(プレアデス星団)を記録した。2018年において可能かどうかは課題であったが、昭和10年代生まれの若い話者までイカ釣りの役星の伝承が伝えられていた。

4-3. 星の降る池

沼澤茂美氏は、中村忠一氏の「星の降る池」とドードの「星」をつきあわせ、三匹の馬星(北斗の柄)、馬子星(アルコル)、魂の車座(北斗の四角形)、うぐいすのかご星(すばる)、熊手星(オリオン座三つ星、おおかみ星(シリウス)と同定した。(沼澤 2008) 中村忠一氏が「星の降る池」で記している「たましひの車座」「三びきの馬星」「馬子星」「うぐいすの籠星」「熊手星」「狼星」(中村 1938)はドードの『風車小屋からの便り』の「星」の項(木村譯註 1929)の影響を受けているものの、「星が流れるのは、里人の誰かが、極楽へはいった印だ」というのは、神林村に語り伝えられた伝承である可能性が高いのではなからうか。昭和19年生まれの話者が「星が流れる。あれは亡くなってどっかい。あれはどことこのじいちゃん、ばあちゃん、流れていったんだよ。星になって流れていって、挨拶だよ」と語ってくれたのに通ずるのではなからうか。

なお、熊手は、日本の伝統的な星名として存在しても不思議でない生活道具であり、そのような生活道具に基づく星名がドードの記すフランスにおいて伝えられているのかどうかは興味があり、今後の課題とした。

4-4. 山口県日本海側(北浦)

山口県の日本海側の緯度は、兵庫県神戸市よりも南であり、カノープスを見る条件に恵まれている。松尾厚氏によると、山口県萩市玉江浦等に伝えられていたフヨタロー(不用太郎)は、「不精者」「怠惰な人」という意味で、他の星のように東から出て南の空高くのぼらないカノープスを的確に表現した横着星に通ずる星名である。カノープスの多様で豊かな星名伝承は瀬戸内海沿岸以外にも伝えられている。

5. おわりに

2017年は星名伝承の調査が困難であったが、2018年は予想以上に記録できた。星名の伝承者のひとりひとり、そして、調査に多大なご協力をいただいた沼澤茂美氏、沼澤和美氏、松尾厚氏に、紙面を借りてお礼を申し上げます。

参考文献

木村太郎譯註:1929, 風車小屋からの便り, 白水社

中村忠一:1938, 岩樟舟夜話, 高志社

沼澤茂美:2008, にいがた星紀行, 野島出版

千田守康:2015, ふるさとの星 和名歳時記, 河北新報出版センター

北尾浩一:2018, 日本の星名事典, 原書房